宮沢賢治と農業

岩手の有機農業 100号 2016.6.21. 岩手県有機農業研究会

中島紀一先生講演概要「岩手の有機農業の世界と今後の展望」

※ 以下の概要は、に岩手有機農業研究会研修会(2015年11月28日、於:岩手県立大学アイーナキャンパス第2学習室)での中島紀一先生(茨城大学農学部名誉教授)の講演を、三須田善暢が当日の記録したメモと録音に基づき編集したものです。内容については中島先生ご本人の確認をいただいております。なお、この研修会は、岩手農民大学との共催です。

【岩手で宮沢賢治を語る意義】

三須田先生からは主に TPP についても話してほしいというご依頼でした。それについても最後の部分で私の見方をお話ししたいと思いますが、その前に「宮沢賢治と農業」について少しお話しさせて下さい。

2年前に日本有機農研の大会が雫石で開催され、そこでは宮沢賢治が一つのテーマでした。私も宮沢賢治論の新展開に期待をしてその会に参加しましたが、ちょっと期待外れでした。せっかく岩手で宮沢賢治を語るなら地元らしくもう少しつつこんでもいいんじゃないかという感想でした。とくに賢治と農業というテーマについては弱かったように感じました。

今年の夏に真嶋さん、入江さんと湯田温泉で一晩話したことがありました。お二人のお話では、花巻では、宮沢家は相当なステイタスがあり、花巻の方々の間ではいまでも「あの宮沢家の賢治さん」という感覚が残っているということでした。せっかく岩手の雫石で農業関係者が賢治を語るなら、こんなことも含めて、もう少し岩手県に即して、また有機農業の大会なんですから、童話作家という側面からだけでなく、農業の側面からも突っ込んで欲しかったという感想を持ちました。そんな関係で、湯田温泉でのその晩は、三人で賢治についてもいろいろ楽しく語り合いました。その時の懇談が一つのきっかけになって、今日のこの会が企画されたという経過もあるようなので、最初に「宮沢賢治と農業」について私の考えをお話しさせて下さい。

いま宮沢賢治は国民的とも言えるほどの大人気で、賢治が岩手の農業系の人だったことくらいは広く知られています。しかし、農業と宮沢賢治の関係についてきちんと論じた文献はほとんどありません。地質学と宮沢賢治の関係についてのしっかりした研究書はたくさんあるようなのですが。

宮沢賢治は亡くなる少し前に、病の床で、「グスコーブドリの伝記」(既発表の類似した物語をまとめて)を校訂、完成させました。

ほぼ同じ時期に「雨ニモマケズ」を手帖に書いています。

賢治が病の床で、最後に、この二つをそれぞれに心を込めて書いたというのはとても象徴的な意味があると私は感じています。

それぞれの内容を読んでみればその内容、そこに込められた方向性は全然かみ合わない。このかみ合わなさをどう受けとめるのか、ここに大切な論点があるように思えるのです。

そこに実は深い整合性があったという見方も可能かもしれません。しかし、おそらくそうではないでしょう。宮沢賢治自身もこの二つの作品は、かみ合っていると思っていなかったと思います。死の床で賢治の思いは分裂していた。恐らくその分裂を賢治は意識していて、賢治はそこで苦悩していた。私はそんなふう

に受けとめています。

「雨ニモマケズ」は手帖のメモ書きで、賢治がこれを自分の詩作としてどこまで意識していたかはよくわかりませんが、そこに死の床での賢治の突き詰めた思いが記されていることは間違いのないと思います。

「グスコブドリ」の伝記は、寒い夏に、作物は深刻な冷害にやられそうな時に、グスコブドリ少年が、科学を頼りに、火山を人為的に爆発させて、チッソ肥料分をたくさん含んだ雨を降らせて、それで冷害に打ち克ち、そうしたら農民は幸せになれるだろうという話です。自己犠牲的英雄主義が貫かれた一つの夢が描かれています。しかし、そこに記されているのはかなり徹底的に人工による自然改造的な科学の構想です。

その大きく広がるヒロイックな物語と雨ニモマケズの自省的な精神とはやはりかみ合わないだろうと思います。科学や自然や農業と人々の関係性という面から言えば、それは180度逆の方向性だと言わざるを得ません。

繰り返しになりますが、私にはそのかみ合わないところにこそ宮沢賢治の最後の姿、最後の苦悩の姿があったと理解すべきではないかと考えています。そのかみ合わない苦悩を、その後の時代を生きてきた私たちはどう受け止めていくのか。賢治が解き得なかった矛盾するこの問題についてしっかり考えて行くことが後進の私たちの仕事だ思うのです。

賢治先生の次の時代を生きてきた私たちは、賢治先生が解き得なかった矛盾する二つの道の分岐に関して、実はそこには第三の道があった。賢治先生は知り得なかった第三の道が、実はその後の時代に、農の道として開かれてきたと私は考えています。

その後の私たちの歩みを振り返り、整理して、先人である宮沢賢治先生に「あなたが死んでから80年、90年たって、いま農業はこんな風に新しく展開し、あなたがぶつかった問題は、少しずつ新しい方向で深まり、新しい世界が開かれつつありますよ」と報告できたら、賢治先生はとても喜んでくれるんじゃないかっていう気がしています。

私には草の根での有機農業・自然農法の歩みがその第三の道だと位置付けられると考えられるのです。

宮沢賢治が亡くなったちょうど少し後に、日本では有機農業の最初の提唱がありました。農業哲学者の福岡正信さんと宗教家の岡田茂吉さんがそれぞれ

れ別々に有機農業・自然農法の提唱をしたのが1935年のころでした。

宮沢賢治が苦悩のなかで亡くなったごく少し後に、グスコブドリのような自然改造の方向で農民を助けるという技術の方向ではなく、自然の命の力に即した形で農民があたらしい農の世界を作っていこうという有機農業・自然農法が提唱されたのです。その後の様々な紆余極性はありませんでしたが、この提唱を受けとめた取り組みはたゆまず継続され、70年80年にわたる草の根での農家の模索的な取り組みの中から一つの農業のあり方、展望が、有機農業、自然農法として、形あるものとして農の現場で作られてきた。そのことをその後の時代を農の道として歩んできた百姓の言葉でそのことをちゃんと報告できたら、賢治先生はきっととても喜んでくれるだろうと思うのです。

【世間での宮沢賢治の語られ方】

世間でいま宮沢賢治がどんな風に語られているのかというと、今年(2015年)の10月の朝日新聞に「今こそ宮沢賢治」という企画記事が載りました。この記事では、「農民芸術概論綱要」にある「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という言葉が紹介され、そんな賢治の気持ちがある今の若い人のなかに響いているようだと書いてあった。それはそうかもしれない。いまの安保法案に反対する若者たちの行動などを見ると、賢治の心があたらしい世代のなかに響くことはあるのだろうとは思いました。

でもね、朝日新聞が、世界の大人気者の宮沢賢治をいまあえて企画記事で語って、結局この程度の話なのかと正直のところがありました。賢治は農の道を生きようとした、さらに言えばそこで討ち死にした先人なのですから。この記事はいい記事ではあるけど、農の道を生きようとした賢治についての現代的紹介としてはあまりにもお粗末だという気が私にはしました。農業関係者はもう少しちゃんと宮沢賢治の農についてアプローチしておかなくてはダメだなと自己反省も含めて強く感じました。

この記事のメインは「農民芸術概論」の言葉の紹介です。賢治は百姓に向かって、自分が本統の百姓になるという跳躍の時の自己宣言として、この言葉を若い百姓たちに向かって語っているのに、この記事には農業の「の」の字も全くない。銀河鉄道の世界の共有を言うだけでは、農の道に生きようとして討ち死にした宮沢賢治に迫ることはできないと思います。

例えば、妙な言い方になりますが、花巻農学校を退職せずに、あのまま童話作家をやっていたら賢治はあんなに早死にせずにすんだのかもしれない。賢治は農学校教師を辞めて、農の世界に飛び込み、農作業と肥料相談で、明らかに体を酷使した。もしそれがなければ、もしかしたら、あんな風に死ななくてもすんだのかもしれない。そういう危険性を賢治が事前に察知していたとは思いますが、しかし、賢治の農への飛翔は、明らかに命がけだったろうと思います。いま私たちは農の道に進もうとした賢治さんについて、そのことをもっとちゃんと語らなくてはダメだと思います。

2011年に日本農業新聞に掲載された原田ハマさんの連載小説では、宮沢賢治が農業にどうかかわったかが少し書かれています。朝日新聞の今回の記

事とは違って日本農業新聞の原田さんの小説ではそれなりに農業と宮沢賢治について語られている。その意味ではこちらの方がずうっといい。ではそこで原田さんは何を語っているのか。

宮沢賢治は花壇をつくるのが好きなようでしたが、農業ということになれば、対象はもっぱら米作りでした。

伝統的な岩手農業のベースには雑穀農業がベースにありました。それが岩手農業の伝統的風土でした。1920年代、賢治が生きた時代に、そんな岩手に近代稲作が怒濤のように入り込んできた。稲作はとても魅力的なもので、多くの百姓はこの流れに乗りました。しかし、技術的には大混乱がおこります。水田稲作自体が冷涼な岩手の土地に馴染み切れていない段階に、同時に硫安や過リン酸石灰などの化学肥料がどっと入り込んできたのです。混乱は当然でしょう。イネは軒並みに倒伏し、稲熱病が蔓延し、冷害も多発していきます。農家の暮らしについては明治の終わり頃から多くの農家は没落し小作人となり地主制が支配的な体制となっていた。

そこで賢治は、一方で地主制の社会を嫌悪し、併せて彼の盛岡高等農林学校以来のすべての勉強と調査と百姓からの聞き取りを踏まえて、そんな大混乱の田んぼとイネに貧しい農家に寄り添いながら向き合ったのです。

原田さんはこの小説で、賢治のそんな頑張りについて書いています。その点はとてもいいですね。でも筆が滑ったのでしょう。事実と違うことも書いてしまっている。例えば「賢治は自分で品種改良を手掛けて」、なんて書いている。これは間違いでしょう。宮沢賢治は冷害に強く化学肥料への適応性も高い陸羽 132号という農林省育成の新品種の普及に務めました。彼自身が品種改良を手がけたという事実はないだろうと思います。

【宮沢賢治と農業——農民芸術概論綱要について】

宮沢賢治の本を農業の視点から冷静に読んでいる農業関係者は「宮沢賢治って化学肥料主義者じゃないの？」と受け止めることの方が普通じゃないかと思います。彼は、化学肥料を技術として受け入れて、その上でその使い方について百姓とともに苦悩するんですよ。

岩手の平坦部では稲作が普通の農業となり、それがまだ安定していない段階で、硫安がたくさん使われるようになり、稲はめざましく生長するけれどバタバタと倒伏していく。この大混乱の中で、農家はどうしたらいいか解らずに苦悩していた。このまま化学肥料多肥を続けていたのでは百姓は幸せになれない。しかし、技術を丁寧に工夫していけば、そこに技術が確立されれば、きっと倒れない稲がつくれる、その技術があれば見事な稲作は可能だ。そのとき彼はそう考えた。「やっぱり堆肥を入れることが大事なんだ。化学肥料ばかりで博打のような農業をするんじゃないかと、もっと堅実に田んぼの条件に合わせて堆肥を入れて、化学肥料はほどほどに、こういう風に使った方がいいんじゃないか」ということを処方箋を書きながら指導していった。だから、彼を化学肥料主義者だと決めつけるのもちょっと違うんじゃないかと思いますね。

宮沢賢治をものすごく高く評価する人と、宮沢賢治は化学肥料主義でそこ

からは有機農業は語れないと考える人がいて、そこに対話が成り立っていない。これほど国民的に人気のある宮沢賢治に対して、しかも本統の百姓になるんだという言葉を残した人について、岩手の現場の百姓たちが「賢治先生は本当はこういう志だった、百姓の立場からすると賢治先生はこういう人だったんだよ」ということを、もうちょっとちゃんと語った方がいいんじゃないかという気がしたんです。

宮沢賢治はものすごく多作な方ですが、農業についてしっかり語っている作品はわずかしかなかった。農業そのものについては1冊になるかならないくらいしか書いていない。農業周辺や農村の自然にかかわるようなファンタジーや詩はたくさん書いているが、農業そのものについてはあまり書いていないです。本統の百姓としての彼の時間がもう少しあれば彼はそれについてたくさん書いたでしょう。でも彼にはその時間がなかった。

彼は盛岡高等農林学校(いまの岩手大学)の土壌学の秀才で、花巻周辺の農林土壌調査を詳細にやって、その後花巻農業高校の前身の花巻農学校の先生になる。でも花巻農学校の先生になったとき彼は百姓をやっているかというところもそうではない。盛岡高等農林でも土壌学は学び、現地の調査はしているけれど、百姓にはなっていない。花巻農学校でも、花壇はつくり講義はしたが農業そのものはしていない。彼は卒業生に「よそに行くんじゃない、家の百姓で生きろ」と諭す。しかし、彼としては自分を振り返り「じゃあお前はどうかだ」と悩んだんですね。実家の質屋の家業への嫌悪もついていた。30歳のときですね。彼が花巻農学校で才能をおおいに発揮し、多方面で大活躍しているその時に、「俺はこんなことやってられない。俺は本統の百姓になるんだ」ということで花巻農学校を退職して、羅須地人協会を立ち上げ、北上川河畔の別荘にこもって百姓を始めるわけです。そのときに羅須地人協会のはじめの講義で、農民芸術概論綱要を講じるのです。いま残っているのはそのときの受講生による講義録。あの頃の百姓はすごいですね。宮沢賢治がしゃべったことを、かなり難解な講義のすべてをノートに正確に書きとっていた。昔の百姓っていうのはすごかったなと思います。農学校を退職したのは3月で、この農民芸術概論綱要を書いたのは5月か6月くらいだったらいい。ですからこれは彼の経験的結論を述べたのではなく、あたらしい百姓としての生活をはじめるにあたっての宣言文としてこれを書いたのですね。

それから1年間、彼は百姓仕事をするんです。無我夢中だったようです。その時の百姓仕事についての詩が何篇か残っている。内容は百姓仕事は全然うまくいっていないということばかりだったようです。

たとえば自炊生活をして、弟子みたいな仲間と一緒に生活するが、ご飯をたくさん炊いて、井戸のところにつるしておくと思えば悪くならない、沢庵と一緒に食べるとおいしいとか書いている。どうもそこには普通の食の豊かさという感覚はないですね。腹が減ったから食べる、疲れたらその場でばたんと倒れる。目覚めるまでそこで眠る。足や何か傷だらけ。懸命に農業の道に突進したんだと思います。

でも、百姓仕事はガムシャラにやればいわけではなく、初心者としてちゃんと先輩の百姓に習って始めるべきだったように思います。やってみただけで全然

うまくいっていないという詩がほぼ1年分残っています。

宮沢賢治は百姓とともに、百姓に教えられて、百姓の先輩のあとをついていくというよりも、藪だけのところを茨や何かがあってもかまわず突進して行って、結果としてなかなかうまくいかない。だから、これが宮沢賢治の詩かなあと思うようなものすごく暗い言葉がそのころの詩にはずうっと残されています。

農の喜びというか、農の豊かさというか、仕事の楽しさというものは、彼らは実感できていなかったのだと思います。

しかし彼はものすごく有能な技術者ですから、彼の施肥についての考え方のリアリティはすごいですね。彼が茨の原を開墾したことではなく、周りの百姓たちは「賢治先生に施肥設計してもらおうと稲が頼れないよ」というのでどんどん周りから注文が来たようです。羅須地人協会2年目はどうももっぱら農家の依頼に応じて施肥設計の仕事に没頭していたようです。2000例とか3000例の施肥設計を1年間か2年間の間に彼は書いている。どう考えても1時間か2時間は相手と対話しないとこの施肥設計書は書けないだろうなという実に優れた詳細な施肥設計を書いている。

「あなたの田んぼはどこのどういう田んぼですか」「あそこですか。あそこのお宮と同じ田んぼですね。そこより一段上ですか」「歩くとふわふわ跳ね返るところですか」などということを実に的確に聞き取った上で、「さて、あなたは百年に一度のような博打のような百姓をやりたいんですか、それとも堅実にやりたいんですか」「堅実にやりたいなら堆肥を入れることが大事なんですよ」という施肥設計を書いている。博打のようならば化学肥料を入れた方がいい、そうじゃないんだっただけ抑えた方がいい、ということを一枚一枚具体的に書いている。これに対応していたらおそらく寝ている暇もなかったろうと思います。

1年目に荒れ地の開墾に突っ込んだんですね。2年目には百姓からの期待・要望に寝ずに応えて施肥相談に取り組んだのだと思います。でも、その無理が災いしたのでしょう。2年半後には血を吐いて倒れてしまいます。

ですから、宮沢賢治がしっかりと百姓をやったのはおそらく1年くらい。残りの1年半は主として技術者としては活躍していた。彼は百姓にもものすごく熱い思いはあったけれど、彼自身の歩みとしては、農業の入り口のところで農業とうまくなじめないまま討ち死にしたというのがリアルなところではないかと思います。

【宮沢賢治の農業労働観】

農民芸術概論綱要から抜き書きをしました。これは人気がある文章で実に格好いいですね。僕も大好きな文章です。でも、いまお話ししたようなことを考えながら読んでみると少し苦笑するところがある。

「曾て我らの師父たちは乏しいながら可成楽しく生きてゐた」。これは文句なくいいですね。

「そこには芸術もあり宗教もあった」。これもじつにいい。

でもその次。「いまわれらにはただ労働が 生存があるばかりである」「芸術をもてあの灰色の労働を燃せ」って書いてある。この言葉自身もとても格好いいですね。一般的に言えば、相当鋭いことをいっているということになる。「ただ労働

が「生存があるばかり」ということは、そうかもしれない。ヒューマニストの宮沢賢治からするとそういうことを見たのかもしれない。

でも、百姓の視点からすればどうでしょうか。「同情してくれるのはいいけれど、百姓っていうと、そう暗いこと、つらいことばかりではない。つらいばかりだとしたらとても続けられないよ。そこには楽しみや喜びもある。ただそれが経済的成果にならないということが苦しいんであって、灰色の労働ということとはちょっと違うよね」。しっかりした百姓ならそんな感想をもつだろうと思います。

おそらく宮沢賢治がもう少し命を長らえて、百姓もいろんな人から教えられて、結構上手になっていたとしたら、こういう文章は書かなかったのではないかと思います。これは本統の百姓をやりますと宣言して学校の先生をやめた直後に書いている文章なんですよ。ですら、農民芸術概論綱要をもって農業原論であると語るのはちょっと無理だよなという気がします。そういう風に理想化して見ちゃったら、農業初心者だった宮沢賢治に気の毒だと思います。「これから俺は、こういう風な宣言を書いたうえで百姓に飛び込もう」というその時の志を記した宣言文。その宣言文に内容的に稚拙なところがあつたってあとから言われても仕方がない。これは暖かく見守ってあげるべき文章であつて、これを無前提に持ち上げるのは宮沢賢治のリアリティと違うのではないかと思います。

同じような意味でその次のところも面白いですね。「ここにはわれら不断の潔く楽しい創造がある」。灰色の労働を芸術で燃やしていくところに彼の夢があつたのね。

では彼の労働観はどういうものだったのか。そこには「行動準志」という言葉が記されています。「準志」とは「目的」というドイツ語の森鷗外による訳語だそうです。意味は実際の行動と志をうまくつなげていけば、労働すなわち競技体操となるということのようです。でもこれは明らかに違うでしょう。農業労働はフィギュアスケートや 100m 走るとかいうのとは全然違いますよ。賢治は農業労働の理想像をそういう競技や体操のみごとなあり方と重ねている。でも農作業というのはそんなふういきびきびと動くのが理想だなんていうことではないですよ。もっと長く続いて、くたびれたら腰を伸ばして、次にやるのはいやだな、でもやらないと終わらないよな、と思いながら繰り返すのが農業における「行動準志」でしょう。田畑や作物の自然に則した農作業が農の志につながっていくのが農業労働であつて、それを競技体操がよしとするなんていうのは、ほとんど彼は農の労働にある深さが分かっていない……。仕方がないですよ。彼は初心者なんですから。宮沢賢治が農業の入り口にあつたときの彼の労働への認識はそういうものであつた。でも彼はその志で突っ込んで、百姓とともに生きようとして、あえなく討ち死にしました。それは実にまっとうであり、やはり彼はわれわれの仰ぎ見る先輩だと思います。

ここで聞きの方のなかにも、新規参入の頃、賢治の農民芸術概論綱要のような宣言をしてつっこんで頑張った方もおられると思います。つっこんだ頃の志は志だけれど、その後の経験を踏まえた、よくこなれた巧みな労働のあり方も真実なのだと思います。こういう宣言をする気持ちもわかる。でも、これが到達点ではなくここからいろいろな話が始まっていったと受けとめるべきでしょう。

熊本に松田喜一さんという、大勢の若い百姓を育てた神様のような大リーダーがおられた。その人が百姓の5段階ということを書いている、最後は「信仰としての百姓」としている。彼の塾は朝早く若者たちをたたき起こして労働に駆り立てるものすごいスパルタ学校だったようだけれど、その先に「信仰としての百姓」があるということを書いている。松田喜一さんの方にとって、本当に信仰としての百姓が将来の夢としてあったかどうかはともかく、農の道には深みと高みがあると松田さんは認識していた。そういう意味では農民芸術概論綱要はとてもいい文章だけど、賢治のこの文章を、天才賢治の農業原論、彼の農の思想の到達点として受けとめるとすればちょっと違うんじゃないかと思います。この点ではやはり松田喜一さんには及ばない。当然のことだと思います。

彼はこういう宣言をして2年半で倒れて、その後、苦しい闘病生活4年半で亡くなる。亡くなる前の日にも百姓が訪ねてきて施肥設計をした。そのときはすでに血を吐くような病状だったのに正座をして施肥設計を教えた。その病の床のなかで、「グスコブドリの伝記」と「雨ニモマケズ」という、私からすると方向性の違うものを書いた。

【「グスコブドリの伝記」と「雨ニモマケズ」の分岐・分裂】

「賢治は死に至る床の中で、『グスコブドリの伝記』と『雨ニモマケズ』を書いた。この二つの作品のモチーフは明らかに異なっている。『グスコブドリの伝記』は自己犠牲的な若い技術者が、火山爆発を誘導して窒素肥料を天から降らしたり、冷害を回避したりするという形で、いわば自然を人工的に改変するという線上に農民たちの幸せを実現するというあり方を描いている。それに対して『雨ニモマケズ』では、人の無力さを知ったうえで、天地の動向をそのままに受け入れて、つつましく生きていくという求道的な生き方が示されている。賢治の中で、この二つのあり方は離反し、結局一つの像にはならなかったのだろう。まじめな賢治には、その分裂は苦悩の迷いだったと思われる」（「地人の道を歩もうとした宮沢賢治——農業技師という側面から」、『農民文学』296号、2012年）

これは私が宮沢賢治と農業について論じた論文の一節です。

この問題については実は以前から2つの異なった有力な評価があるんです。

一方の極は吉本隆明という著名な思想家の見解で、グスコブドリこそが宮沢賢治の最高傑作だといっているんです。日本の詩人で科学技術の可能性についてこういう確定的なことを語った文学者は宮沢賢治以外1人もいないと言っている。その線上で、吉本隆明は3.11の少し後に、原発を否定することは人類の可能性を否定することなんだといって原発推進を主張しました。内心そう思っているというだけじゃなくて、彼はそれを激しく語った。宮沢賢治と吉本隆明の思想のあり方は明らかに違うけれども、吉本は一貫して宮沢賢治を高く評価し、そしてほぼ最後に、グスコブドリをそういう風に位置付けた。

農業の関係でいうと、山形の真壁仁さんも実は同じような見解を書いています。——真壁さんは山形で農民詩をずうっと書いていて、地域文化運動の優れたリーダーとして知られており、星寛治も真壁さんの下で活動されてきた方で

す。実に素敵なお方なのですが、彼はグスコブドリ派なんです。彼は大まかには自立・自治、反逆的精神の方ですが、農業技術路線としては決定的に農業近代化派、生産力向上主義者でした。

真壁さんの同時代に山形の新庄には松田甚次郎という方がいました。松田さんは雨ニモナケズに心酔した百姓でした。松田さんは盛岡高等農林の少し後輩で、花巻の賢治に会いに行き、賢治から「小作人たれ」「農村劇をやれ」と言われて、それを真面目に実践した人です。真壁さんはその松田さんを批判して、「そんなものは百姓の現実をまったく知らない人間がいうことであって、百姓は化学肥料も上手に使うと収量を高めていくのが道なんだ、賢治はその道を拓こうとしたのだ」ということを力説した。真壁さんには宮沢賢治についての本が一冊ありますが（『修羅の渚——宮沢賢治拾遺』秋田書房、1985、真壁さんの没後の出版）、グスコブドリの流れで真壁さんの考えが記されています。

しかし、宮沢賢治が一般の人たちに幅広く知られてきたのは、国語の教科書に雨ニモマケズが載っているからだからで、ですからごく普通の賢治ファンにとっては何と言っても「雨ニモマケズ」でしょう。「雨ニモマケズ」こそが賢治の真髓だと力説したのが哲学者の谷川徹三さんでした。彼はその視点から、信仰のような賛辞の本を書いています。

賢治への評価、賢治の最後の二つの作品を巡って評価はかなり激しく二分されているのです。これは仕方のないことだと思います。宮沢賢治自身の中で道は二分され、その分岐は交わらず、実は彼の内面ではおそらくこの分岐、分裂にこそ彼の最後の苦悩があったように思われるのです。

文学論としてはこの論争はこれからも続くと思いますが、いまを生きる百姓の視点からすれば、賢治が苦悩したこの二つの道の分岐・分裂の問題を私たちとしてどのように受けとめるかが問われているのだと思います。

病の床で彼が「グスコブドリの伝記」を完成させた気持ちは、貧しくて苦悩する百姓を救いたいということでした。盛岡高等農林で地質学的土壌学を学び技術で貧しい百姓が救われる道を開こうとした。何とか技術で展望を開けないか苦闘した。でも、課題はそんなに簡単なことではなかった。そのことがわかる賢治は「俺のようなつまらん人間、俺はテクノボーとしてしか生きていけないんだ」とも考える。実にまじめな人ですね。

こんなに明らかに食い違っている二つの作品が彼の最後の代表作としてわれわれの前に残されている。「雨ニモマケズ」はいまでも教科書に載っているし、「グスコブドリの伝記」は最近も映画になったようです。しかし、農業技術論としてはここに明らかに矛盾があり、そこに賢治の苦悩があったことはなかなか明確にはされてこない。これではダメだと私は思います。

【土と作物の生命力を生かした栽培】

さて、宮沢賢治と農業というテーマで私の考えを少しご紹介しましたが、お話し最初のところで設定した、第三の道としての有機農業・自然農法という点について次に私の問題意識、私の理解の枠組みについてお話しします。

賢治先生の農業は端的には稲作でしたから、ここでも稲作を例にとりたいと思

います。有機農業・自然農法の稲作と言っても、その実態は実に多様で、地域による特徴も様々です。それらについてここで私の認識を詳しくお話する訳にもいかないので、私がいま最高の到達点だと考えている奈良県桜井市の木戸将之さんご夫妻のイネと田んぼについてご紹介したいと思います。

木戸さんはいま50歳代の前半。以前は神戸にお住まいで阪神・淡路大震災で被災され、サラリーマンを辞めて、自然農法で農業に新規参入された方です。奈良盆地で自然農法一筋に20年取り組んでこられました。

この方は無肥料で、堆肥もやらない、藁も全部持ちだしちゃう。ですから木戸さんの稲作は「施肥を軸とした技術体系」から完全に外れています。20年間まったく施肥をせずに、しかもいまでは秋の収穫の時は地域の慣行農法の篤農家と遜色ない立派な収穫を安定して得ています。とても健康で見事なイネです。こういうイネが無施肥で、さらに言えば無施肥だからこそ育つという事実が実に驚異だと思います。施肥のあり方の工夫と助言に心血を注ぎ、死の床で「グスコブドリの伝記」を完成させたのが賢治先生でした。グスコブドリのように天から化学肥料が降らなくても、また、施肥設計をして、絶妙な肥培管理をしなくても、土と稲の命がうまくつながっていくとこういうイネが育ち、慣行栽培に負けない収量が安定して得られている。そんな道が、賢治先生が亡くなって80年も経ったいま、草の根の百姓によって開かれてきている。このことの意味は重いと思います。

木戸さんは、自家採種で、田んぼ1枚1枚に馴染んだ種を選び、畑苗代で、超薄播き、自然発芽、2ヶ月ほどの苗代期間で、3~5本に分けつした実のみごとな苗を育てて、30 cm×39 cmの疎植で1本植えます。水管理は深水です。土が良くなっているからでしょう、草取りも必要なくなっています。イネの育ちは開帳型でほれほれするような姿です。葉色もほどほどで健全な色合いです。

なにより驚くことは根の張りのものすごさです。田んぼや品種で少しの違いがありますが、2015年の場合トヨサトという品種で登熟期の1株(1粒1本植え)の根数が2099本、この時は茎数36本でしたから、1茎(穂)当たり根数は58本でした。しかもこの根数は最高分けつ期、幼穂形成期、そして登熟期へと次第に増えていきます。出穂後も根は増え続けているのです。しかもその膨大な根はほぼすべて健全な状態にありました。

そして稲刈りのあとの田んぼです。稲刈り時にはイネの株下には冬草がびっしりと芽生えています。夏と冬のみごとな命の交替です。そして冬草の根の張り、ルートマットの発達が見事です。

こうしたイネの育ちに対応した田んぼの土壌構造はどうなっているのか。田植え前の5月に土壌断面調査をしてみました。掘ってみると75~80 cmの所に地下水位がありました。イネの根は地下水近くまでびっしりと張っていて、根の張りに対応して下層部まで褐色となっていました。グライ層の形成はまったくありません。さきほど紹介したイネの生育期から登熟期にいたる驚くほどの根の伸長は、下層土までびっしりと届き、土壌の構造を変えてきていたのです。

【有機農業の第2ステージ:低投入・内部循環・自然共生へ】

ここで紹介した木戸さんの稲作がどこまで一般化出来るかどうか、これからしっかりとした吟味が必要でしょう。しかし、木戸さんの稲作は現に実在しており、木戸さんの20年に及ぶ真摯な取り組みの中から事実として展開しているのです。

この事実をどのように理解したらよいのか。これからこのことについての私の理解、私としての理屈の話を、一つの仮説としてお話ししたいと思います。

化学肥料、農薬を使わないというのはいまでは誰もが承認する有機農業の一つの前提でしょう。この前提が、有機農業関係者の間でいつ頃成立したのか。にわかには断言できませんが、レイチェル・カーソンは『沈黙の春』(1964年)の最後の章を「ベつの道」として、それを「ノンケミカルの道」、化学物質依存からの離脱を強く提唱しています。「ノンケミカル」はレイチェル・カーソンだけが言いだしたテーマではありませんが、『沈黙の春』が有機農業の社会的展開に果たした役割は極めて大きかったことを考えると、彼女の提唱は大きなエポックだったことは間違いなくと思います。別の言い方をするとレイチェル・カーソンの提唱に呼応しつつ多くの有機農業家が有機農業に取り組んできた。

しかし、考えてみれば「ノンケミカル」は一つの前提であって、それだけでは農業にはならない。「ノンケミカル」を一つの前提として、その前提の上で農業の技術的、経営的、社会的構造を農法として組み立てていく、それが有機農業への道だったはずですが。

しかし、現実には「ノンケミカル」は厳しく強調されてきましたが、それを前提とした農法形成については、さまざまな模索、試行錯誤の累積はあったと思いますが、より意識的に、組織的、現実的、そして理論的 pursuit が骨太に pursuit されてきたかと問われれば、それはかなり不十分だった言わざるを得ません。

たとえば有機JAS規格、コーデックスやIFOAMの基準においては、それがどこまできちんとノンケミカルが貫かれているかについてはかなり厳格ですが、その取り組みが何を目指し、どこに向かおうとしているのか、それがどのような農法を形成していくのかについてはほぼまったく言及されていません。そこにはほとんど関心がおかれていないと言わざるを得ません。そして多くの有機農業関係者はそのことに強い違和感を感じておられないように思われます。

わたしたちがもっと意識的に取り組まなくてはならないことは、ノンケミカルの厳密さではなく、豊かな農法形成への模索であった筈です。しかし、この課題の取り組みは率直に言って不十分だったと反省せざるを得ませんでした。

有機農業推進法は奇跡のような幸運に恵まれて制定されましたが、その段階で、では有機農業とはどんな農業なのか、それは何を目指し、どんな農法として自己形成されてきたのか、そのきわめて初歩的事柄が実はあまり鮮明とはなっていませんでした。

せつかくの取り組みの蓄積があったにもかかわらず、それがきちんと整理され、しゃかいに提示されていなかった。これはとても拙い事態でした。

そこで私は日本有機農業学会の同志と語らって「有機農業技術の歴史的到達点に関する全国調査」に取り組み、また、有志で「自然共生型農業への

「転換・移行に関する研究」に取り組み、また有機農業の最前線で活躍している民間の技術者を募って「有機農業技術会議」を設立し、幅広い協同討議を組織してきました。有機農業、自然農法についての技術的総括への試みでした。

有機農業がその歩みとして、さまざまな実践的模索のなかから、どのような技術的到達点に到達しつつあるのか、それを一つの発展モデル、方向性のある展開モデルとして捉えるならば、そこにはどんな骨格が示されているのか。などの解明がそこでの中心的課題でした。

そうした実証的研究の一つの結論が「有機農業の技術的展開は『低投入・内部循環・自然共生』という方向性をもって展開してきた、それは『慣行栽培からの転換期』、『有機農業としての発展期』、『有機農業の成熟期』という展開過程を辿りつつある」ということでした。

そうした認識を整理して公表したのが中島・金子・西村編著の『有機農業の技術と考え方』(コモンズ、2010)であり、そこで私は「有機農業の基本理念と技術論の骨格」を執筆し、またそれをより体系的に整理したものとして中島著の『有機農業の技術とは何か——土に学び、実践者とともに』(農文協、2013)を執筆刊行しました。そこでの提起した中心的シェーマは図1、2、3でした。

また、これらの共同研究においては有機農業と自然農法をあえて区別せず、それを一括して有機農業として概括し、研究を進めました。しかし、いわゆる有機農業といわゆる自然農法では、その実践や技術的主張には違いがあります。そこで、次にとくに自然農法を取り上げて、その展開の実態とそこに込められてきた技術的主張を実証的に解明することも目的として、当時私が事務局長を務めていた有機農業技術会議として秀明自然農法ネットワークとの協同事業として「秀明自然農法調査研究プロジェクト」(2013～2015)を立ち上げて調査研究に取り組みました。

秀明自然農法ネットワークは宗教家の岡田茂吉氏が提唱した自然農法を忠実に実践してきた集団です。先に紹介した木戸さんもその中心的メンバーの一人です。彼らの主張と実践のなかから、とくに「無施肥」と「自家採種」を取り上げて、その実態、意義、課題などについて、かなり詳しい解明に努めました。その成果の概要は日本有機農業学会の大会でその都度報告してきました(2013年度大会、2014年度大会、2015年度大会)。

それらの研究の中で私が強く主張してきた論点は、有機農業、自然農法は特殊な農法ではなく、きわめてオーソドックスな農業理論だ、農業についての人類史的な長い歩みにおいては、むしろ近代農法——それは工業的な資材依存と自然からの離脱に特質があると考えられますが——の方が歪んだ脇道だったという認識でした。

以上、有機農業の技術理論として述べたことをパワーポイントのチャートとしてまとめておきました。一つの仮説的見解として参考にしていただければと思います。

宮沢賢治の最後の苦悩とその後の時代の草の根での模索の展開、それを私は農が進むべき第三の道と位置付けるのですがどうでしょうか。

【文明史的に決定的な問題】

ここまでは農の道について技術の側面からのお話でしたが、これをもう少し広い社会的視野から見るとどういふ話になるのか。つぎにそれについての私の見方を少しお話ししたいと思います。地球環境問題という視角からの考察です。

地球環境全体についての評価として、最近の人間の諸活動の大展開は地球のキャパシティをすでに超えてしまっているという計測があります。エコロジカルフットプリントと呼称されるこの計測には理論的には問題が多く含まれていますが、ここでは解りやすい参考値として使ってみます。この計測によれば、世界全体では 1980 年代の状態が地球の環境容量のいっぱいであり、その後は 2010 年でいうとだいたい 30%くらいオーバーとなっているとのこと。人間の諸活動の活動量を現在より3割程度は削減しなければ地球環境は破滅に進んでしまうという計測値です。

問題のこの様なとらえ方、経済を軸にした人間活動の総量と地球の環境的キャパシティの関係という考え方を、詳しいシミュレーションを踏まえて最初に明確に提示し、このまま経済活動を加速していったら地球は破滅すると明確な警鐘を鳴らしたのがメドウズの『成長の限界』(邦訳はダイヤモンド社、1972)でした。メドウズは当時、アメリカのマサチューセッツ工科大学の助教授でした。この研究報告は世界に衝撃を与え、それ以降のこれに類する研究や思潮のほぼすべてがメドウズの『成長の限界』を踏まえたものとなりました。これはローマクラブという国際財団からの委託研究の報告書でした。彼らはその後も同様な方法で世界と地球を計測し、15~20 年おきくらいに報告書の提示を続けています。

ここに示した図は 2 回目の報告書『限界を超えて』(1992 年)からとったものです。メドウズはこの図を特に強調しているわけではありませんが、私にとっては実に辛辣な見解でした。彼はここで世界の経済活動における農業の位置を当たり前のこととして提示しています。端的に言えば「上流に工業生産があつて、その下流にそのマーケットとして農業がある」としているのです。現実を冷静に見れば実にその通りなんですね。最上流に自然力とか土の力とか作物の命の力があるというのではなく、ですから農業が上流にあるのではなく、農業は工業の下流にある。農業の社会的生産力の基礎は工業生産力とその成果の消費にあるという事実。工業生産力が資材を提供し、それを使って農業生産が展開している。だからこの構造的な仕組みの下では農業が進めば進むほど資材利用は増え、全体としてみれば先ほどのエコロジカルフットプリントのキャパオーバーの増大という方向に、農業も明確に荷担していく。世界経済においては、農業は副次的な位置にある訳ですが、しかし、明確に「農業よお前もか」という路線に組み込まれているという訳です。

IPCC(気候変動に関する政府間パネル)という組織が地球温暖化について計測して、今後のあり方として、こういうチャートを作っています。

世界全体を見渡して、経済と環境は二律背反のあり方である、地域とグローバル化ということも二律背反的である。そうした認識からこの図のように A1、A2、B1、B2 という象限が設定される。こうした認識の枠組みの中で世界の国々や地

域はどんな方向に進もうとしているのか。

その結論はきわめて明確で、どこの国も地域も、おしなべて経済成長とグローバル化を基本方向として推進し、その上で地球環境問題の解決を図ろうとしている。図で言えばあくまでもA1の象限に居ようとしているのです。しかし、地球環境問題の原因が産業革命以来の経済成長とグローバル化にあるわけですから、その基本路線をそのままにして問題の解決が進むわけがない。

問題の根本的な解決のためには、環境と地域を大切にするB2象限の方向に進むしかないことは明らかなのです。しかし、現実にはB2象限で生きようとしている国はブータンしかないと思います。

A1には理想も展望もないけれど、いまの視点からすれば現実性がある。B2には理想と展望があるけれどそこに至る現実性がみあたらない。これがほんとうのところではないかと思えます。

この明確な問にどのように答えていくのか。実に難問です。

しかし、先ほどの木戸さんの田んぼとイネを見つめてみれば、農業に関してはA1からB2に移行していく現実的可能性、現実的道筋はそれなりに見えてくるように思えるのです。投入しなくても、さらに言えば投入しないからこそ健康な命の豊かさが安定してもたらされていく。そんな世界が作られてきているのです。これはきわめて重要な成果、達成だと思えます。文字通り、こうした農業のあり方こそが「世界を救う道筋となる」ということだと思えます。

木戸さんの田んぼとイネはまだ先端的であり、多くの有機農業はそんな風にはなっていない。でもその志しと方向性はある程度共有できるだろうと思えます。

さきほど私は宮沢賢治の2つの道の分岐・分裂に関して第三の道という設定をしたのですが、このように考えてみれば、有機農業、自然農法が長い模索的歩みの中で開きつつあるこの道は、実は第三の道ではなく、人類史の本道だと位置付けられる道だと言えらると思えます。これは脇道ではなく本道なのです。

宮沢賢治先生がぶつかって解けなかった難問が、その後の百姓たちの草の根の模索の中で、少しずつ解け始めていると感じるのです。

メドウズらの問題提起と警鐘は、産業革命以来の人類社会のあり方が間違っていたことを意味していました。とすれば根本的には産業革命以前へのスイッチバックが図られなければならないということになる。しかし、それは貧しさへの回帰であり、そこには現実的可能性が見つからない。これまでこの大問題へのアプローチはこのように捉えられてきました。しかし、例えば木戸さんの田んぼやイネを先頭ランナーとして、私たちの有機農業、自然農法の取り組みは、そのスイッチバックは貧しさへの回帰ではなく、豊かさへの道であることを示唆しているのです。もちろんまだ端緒的ではありますが、私たちのこの達成の意義はとて大きいと思えます。だからこそ有機農業、自然農法は特殊農法ではなく、農業の本来のあり方への回帰なのです。

【TPP について】

さて最後に TPP や農政の動向について少しお話したいと思います。

TPP は先頃大筋合意となりました。各国での批准、発効にはまだ紆余曲折

があると思われませんが、しかし、これで TPP の内容は一応確定し、日本はその体制下に組み込まれることになりました。これはとても拙いことで、私はいまからでも引き戻した方が良く考えています。協定内容にも隠されている問題点がたくさんあるようです。しかし、今日はそんなことについて詳しくお話しする時間はありませんので、TPP 大筋合意をマスコミなどはどのように受けとめているのか、そこにどんな問題があるのかについて少し指摘したいと思います。

大筋合意の翌日の日本経済新聞の解説では「TPP対応が農業再生最後のチャンス」と書いていました。TPP 対応の一番の決め手は農地集約を進めて規模拡大が進むかどうかだ。規模拡大が進めば TPP に派生する農業問題は解消される。農地集約が進まない原因は耕作放棄地など使われていない農地があってそれが農業に生かされていないからで、それに対しては重課税をすればふとときな百姓たちは土地を吐き出すだろう、というような話です。こんなところが大筋合意以降の TPP 関連のマスコミ論調です。破滅に向けて徹底的に煽られているという気がします。

それに呼応して農政は「攻めの農業」「強い農業」を徹底的に進めようとしている。これも相乗的なものすごい煽りですね。

ガットウルグアイラウンド妥結の時には、ミニマムアクセスという形で米の輸入を認めてしまった。それによる痛みを和らげるために7兆円が用意された。しかし、これはバラマキで、7兆円は農業構造の改変に役立たなかった。今回は4兆円、これはバラマキではなく構造改革に使うのだとTPP推進派の方々は豪語している。そこにはTPPを通してしまった、申し訳ないという気持ちは微塵も示されていない。4兆円は攻めの農業のための資金として使うのだと強調されています。

農業をめぐる政治の状況が一変してしまったと感じます。

「日本農業は古い体質のままだからダメなのだ。しかし、古い農業はもう終わりだ。そんなものはこの機会に一掃して、新しい強い農業を作ることが課題だ。そのためには外部の力を導入し、イノベーションと投資が必要だ」という主張です。4兆円はそのために使うのだということです。

今がチャンスだと煽り立てて、補助金をつけて高額の投資へと一部の農家を誘導している。最新の高性能機械を駆使した水田農業の変貌はすさまじいと感じています。兼業農家による零細農耕の代表とされてきた水田農業は駆逐され、資本集約型(数千万円の機械施設投資)の大規模農業が珍しくなくなりつつあります。でも、しばらくするとこうしたスーパー農家の倒産が続出することでしょう。そんな痛ましい事態が予測されます。

これはとても拙い事態です。こんなことをしていたら日本農業はほんとうに潰れてなくなってしまう。日本農業の崩壊は TPP による直接打撃の前に、TPP に悪のりしている農政効果で危機は加速してしいると感じます。

TPP で自給率は40%から25%に下落すると予測されています。農家の4割は潰れて、廃業して消えてくという予測です。すでにその動きは鮮明になっています。

昨日 2015 年農業センサスの速報値が発表されました。日本農業の総崩れが加速しているという数値がずらりとならんでいました。農業の高齢化が言われ

てきましたが、高齢者農業の絶対的自然減・社会減が進んでいることが数値で示されています。

TPP 対応の農政はこうした動きに拍車をかけている。マスコミはそれを煽り立てている、というのが現在の農政状況だと思います。このままでは日本農業はほんとに終わってしまう。

これまでの戦後日本の農業を担って昭和ヒトケタ世代の方々、80歳代のでした。この方々はほんとうに頑張ってくられた。素晴らしい技術体系を作り上げてこられた。それがいま急速に崩れてきている。その成果を誰も継承できずにいるというのが現在のところだと思います。こんな世情の中で頑張ってくられたヒトケタ世代の方々の引退が加速しているようです。80歳代のヒトケタ世代の方々の跡継ぎが差し迫って必要なのです。とりあえずは60歳代、50歳代の方々でしょうね。

日本農業のこれまでの成果を守ること、それを継承することの大切さは強調しても強調しきれないと感じています。

改めて農業の大切さ、なかでも小さな農業、多数の人々に関わる農業の大切さを国民のみんなに伝えていく。国民多数の農業参加を募っていく、それができなければ地球は終わりでしょう。こんな事態が一方向的に進むようでは賢治先生に申し訳が立ちません。せっかくの有機農業、自然農法の成果も台無しになってしまいます。いまそんな思いがこみ上げてきているところです。